

月見月理解の

つきみづきりかいの

探偵殺人

たんでいさつじん

殺人鬼のいない夏

・一日目

『これは殺人鬼のいない物語だ。  
嘘で塗り固めた刃を握り、殺し合う。《探偵殺人ゲーム》の終わった世界。  
騙されて死ぬ者も、騙して殺す者も存在しない日々が出来事だ。』

僕たちは安穩とした日常に過去を忘れ、それでも、そのささやかな日々が突如として崩れてしまうことを、記憶に刻み込んだまま生きている。

だからこそ、その日々は美しく、愛おしいものだ。僕たちは知っている。

そしてもうすぐ、僕と理解が再会して、初めての夏が過ぎようとしていた。

何の悲劇も起こらないはずの日常のひと欠片。

殺人鬼のいない夏が』

《都築初の日誌より》

### ◆八月二十八日◆

午後七時を過ぎて、ようやく完全に日の落ちた通学路を、僕はゆつくりと歩いていた。  
向かう先は家ではなく、夏休み中の学校だ。

まわりつような重い湿気を肌を感じるのは、九月まで続くとテレビで言われた熱帯夜のせいだけじゃない。ついさっき僕の元送到られてきた、不審な携帯電話のメールによるものだ。

『お前の家に隠れている女について聞きたいことがある。このメールを誰かに話せば、お前たちの安全は保障しない』

最初に送られてきた内容はそれだけだった。そして、思い出したように追伸されたメールの指示により、僕は普段通っている礼進高校へと向かっていたのだ。

「……………」

八月二十八日。

夏休みの終わりまで僅か四日を残した夜の校舎は、実に静かなものだった。

昼間に補習や大学受験者用の特別講義をやっていたのは数日前までの話で、熱心な運動部

でも、今は活動している様子はない。

ただ、学校でも何らかの出入りはあるのか、裏の校門は運良く開いていたので、僕はそこから敷地内に入る。

それにしても、夜の学校は不気味だ。

違っているのは時間ひとつなのに、昼間とは全く異なる気配を醸し出している。

指定されていた特別棟の裏口に向かうと、送られてきたメールの指摘通り、鍵は開いていた。

窓が閉じられ、熱気の充満した特別棟の階段を上り、僕は二階の踊り場に出た。

そこから先の情報は伝えられていなかったが、美術室の扉が開け放たれていたので、中を覗くと、人の息遣いが聞こえてきた。

「……そこに、いるんですか？」

どうやら、僕の勘は当たりだったようだ。明かりは点いておらず、熱気と絵の具の匂いが充満した美術室の中は、全ての窓を黒いカーテンで覆われ、小さな暗室となっていた。

「よく来たな」

暗闇の中、戸棚に隠れていた影が、くぐもった声でそう告げてきた。

わざと手で口元でも押さえているのか、男女のどちらかまでは判別できない。

「どういうつもりですか？　こんなところに呼び出して——」

僕を呼び出した人間の正体は分からないが、あくまでも冷静に僕はそう尋ねる。

呼び出されたときのメールの内容を鑑みるに、『家に隠れている女』とは、僕の家に居候いそうこうしている理解のことで、それを知っているこの相手は、月見月の関係者である可能性がある。

理解は、今から約三ヶ月前、僕のところへやってくる前に、月見月に関する重要な記憶は『洗脳治療』によって、全て消去されたと言っていた。

そして、理解の持つ特殊能力、《無数に扉のある高座》も消失したことになる現状、連中が声を掛けてくる理由については不明だが、敵の正体ははっきりするまではなんとも言えない。

「質問はこちらがする」

だが、僕の疑問は、あっさりとそうはね除けられた。

仕方がない。これから始まる受け答えの中で、僕は相手の正体と真意を読み取らなくてはならない。

「まず、ひとつ目の質問だ。君の家に住まわせている月見月理解という女についてだが——」

「……!?」

いきなり核心に踏み込んできた。やはりこいつは、理解の存在を知っている。

……何が目的だ？

僕が警戒に身を固め、息を呑んだそのとき——、

「君はあの女と、どこまで進んでいる?」

「……………は?」

予想だにしない続きの言葉に、僕が用意していた返答は空を切った。

「学校で後輩や同級生たちといい関係になっておきながら、人目の届かない家ではその女と毎日のように乳練り合ってるそうだな? その辺りをはつきりさせておきたい。で? 君はその女とどこまでしているのだ? □づけか? まさぐり合いか? ベッドインか? それとも君の妹が見たらドン引きするようなことまでプレイ済みなのか?」

「えーっと…………」

そのセリフを聞いて、僕は全身から力が抜けるのを感じる。

今ので大体、この一連の流れの謎が解けてしまった。

あまり知りたくもなかった真実、だけど。

「…………何をやってるんですか? 京先輩」

「ええい! 私の正体についてはどうでもいい! まずはこの質問に答え給え! さっさとこの閉め切った部屋から出ないと暑くてかなわん!」

この人は、いつからこの部屋で僕を待っていたのだろうか?

「何もしてませんってば。理解がひとり生活できるようになるまで、ひとまず僕の家に置いておくだけです。これでいいですか?」

「…………本当かね初君? 嘘ならもう少しリアリティのある嘘を吐き給え。高校生男子が若い女と三ヶ月近くも同棲して特に何もしていないなど、あまりに現実味のない話ではないか?」

「僕にどんな回答を望んでいるんですか…………?」

はあ、と反射的にため息が漏れてしまう。

実際、他人の立場なら僕も疑ってしまうかもしれないが、事実なのだから仕方がない。

最近母さんが仕事の都合上、家に戻ってくる回数が少し増えたこともあるし、妹の遥香に至っては、理解が僕の家<sup>いせうろう</sup>に居候<sup>いせうろう</sup>を始めた辺りから、普通に自宅<sup>はるか</sup>で生活するようになったのだ。

本来、理解を母さんに内緒で僕の家に住まわせているだけでもかなりまずい<sup>はるか</sup>のだから、この時期に更なる暴挙に出ようなんて気は起きない。

「ふむ…………。まあ色々疑わしいことはあるが、君の口を割らせるのは容易ではないだろう。仕方あるまい。ひとまずその話で納得しておくが、皆はどうかね?」

「皆…………?」

嫌な予感<sup>はるか</sup>がして、僕はそっと美術室の扉を開いて廊下に出る。すると、そこには見慣れた僕の友人たちが、室内に向けて耳をそばだてていた。

「きゃっ!?」

まず慌てたように腰を引いたのは宮越<sup>みやこ</sup>さんで、その後ろに、交喙<sup>いすか</sup>に遥香<sup>はるか</sup>という、お馴染みのメンバーが固まっていた。

「何してるの……？」

「え、ええっと、誤解しないで聞いて欲しいんだけど——」

夏服姿の宮越さんが、つつかえながらそう前置きしたとき、

「合宿だそうですね、よ」

交喙が僕の疑問に答えた。

「合宿？」

「はい、放送部の合宿を行うと、京元部長から連絡がありましたので、で」

交喙から詳しく話を聞くと、どうやら京先輩の思いつきによって、この度、放送部の合宿というものが企画されたらしい。

既にOBの身でありながら、学校の敷地にある合宿所や一部の教室などの使用許可も取った京先輩の行動力は驚くべきものがあるけれど、それ以上に突っ込みたい部分があった。

「そんな連絡、全く受けた覚えがないんですが？」

やや引きつった顔で問いかけた僕に、返ってきた言葉はひとつだった。

「当たり前だ。半分君を驚かせるために企画したようなものだからな」

「……はあ」

京先輩の笑顔を見て、聞いてしまったことを逆に後悔する。

「じゃあ、宮越さんや遥香がいるのは——」

「うむ、例によってロクに放送部のメンバーが集まらなかったのな、今回は特別にゲストと呼んでおいた。人がいないとバカ騒ぎはつまらないからな」

「そうですね……」

色々疲れたけど、とりあえず面倒な事件じゃなかったことに、僕は胸を撫で下ろす。

「では、そろそろ宿に向かうとするか？ これからが楽しみだな」

ひとりノリノリな京先輩の指示に従って、ひとまず僕たちは校内を出る。

そして敷地内の宿泊施設である、小さな合宿所に向かうことにした。

\*

「それにしても、なんだってこんな真似をしたのさ？」

受付でチェックを済ませ、ロビーのソファで一息つきながら、僕は対面に座った遥香に、そう尋ねてみた。

合宿所は熱心な部活や、特定のイベントのために存在する小さな宿泊施設で、僕が入学する何年も前から存在する建物だが、年代物であり大人数が泊まれる規模でもないため、実際にここに泊まる人間は少ないらしい。

実際、入学して三年の夏になる僕でも、ここに入るのは初めてだった。

「別にいいっしょ？ 私が来るとなんかまずいわけ？」

僕の問いかけに、少しだけ頬を膨らませて遥香は抗議する。

「いや、そういうわけじゃないけどさ……。っていうか、何で知ってたら京先輩の畏を教えてくれなかったのさ」

「兄貴が優柔不断だからでしょー？ あの探偵さんを勝手にうちに連れ込んだじゃうしさ——。ふたりが何やってるのか、みんな気になってるんだから」

「……………」

遥香の言葉に、僕は返事を躊躇ってしまふ。

その点については僕にも非があるので、反論しにくかった。

「……分かったよ。じゃ、僕は一度家に戻って着替えとかをまとめてくるからさ」

他のメンバーはまだしも、騙されてた僕は体ひとつでここに来てきたわけだから、当然泊まる用意なんてできてない。

「あ、それは大丈夫です、よ」

そう思ってソファから立ち上がった瞬間、交喙がそっと僕のシャツをつまんで引き止めた。

「え……………」

「お兄さんのお着替えは二泊分、ちゃんと用意してきました、から」

そう言って、交喙はロビーに預けていたらしいポストンバッグを取り出し、僕に手渡そう

としてくる。

「あ、わざわざありがとう。……って！ 何で交喙が僕の着替えを用意してるのさ!? 一体どうやって!？」

「あーそれ、京先輩に私が頼まれたんだけど、ひとりじゃめんどくさいからさ。交喙ちゃんに手伝わってもらっちゃったんだ」

無邪気な笑みで種明かしをする遥香に、僕は軽く目眩を覚える。

ジッパーを開けて中身をそっと確認。うん、きつちり替えの下着まで入ってる。

「それって、プライベートの侵害じゃないかしら……。っていうか、何であたしも呼んでくれなかったのよ！」

宮越さんが間違った方向に怒りながらそう指摘する。むしろその突っ込みに僕は突っ込みたくなかったが、今はスルーしようと思う。

妹である遥香もそうだけど、後輩の少女に部屋を物色され、荷造りをされてしまったのはかなり複雑な気分だ。

理解みたいに、余計なところまで家探ししてなければいいんだけど……。

「すみません。不愉快だったでしょう、か？」

どこか気落ちした声を出す交喙を見て、僕は少ししまったと思う。

「……平気だよ。でも、これからはひと声掛けてくれると嬉しいかな」

そういつてぎこちなく笑みを返すと、

「ありがとうございます。お兄さんはやっぱり優しいです、ね」

普段は無表情な彼女に笑顔を見せられると、僕の胸がどきりと高鳴ってしまふ。

「ですが、お兄さんの気分を害したまま、一方的に許されてはいけなと思います。わたしは罰を受けるべきですし、そうでなければ部活の先輩後輩として、示しがつきません、から」

「いや、いいよ本当に、ちゃんと反省してくればそれでいいから——」

そもそも放送部は、幽霊部員を除くと僕と交喙いすかくらいいしかまともに来てないので、上下関係の示しもないと思うのだけど、形だけでも何かした方がいいのだろうか。

「ですから、お兄さんもわたしの荷物を調べていただけじゃないでしょうか？」

ほんの少し顔を背けながら、交喙はおずおずと、彼女自身のものであろう大きめのバッグを差し出してくる。

「え……？」

一瞬、交喙が何を考えているのか分からず、数秒の後に、彼女が罰として自らの荷物を僕に調べさせようとしていることに気づく。

「ちょっと待った！ 僕は別にそこまで怒ってないしき。それに、交喙は女の子じゃないか。僕がこの中を見るのは、その、色々とまずいような……」

なんていうか、すごい変態っぽい気がする。

僕が交喙の見ていない隙すきに同じことをしたら、たぶん部活の問題で済まないんじゃないだろうか、というくらいに。

「いえ、こうでもしないとわたしの気が済みませんので、お願いします」

が、妙なところで頑固な交喙は譲らなかつた。

ロビーでいつまでも押し問答してる訳にもいかないし、仕方ない。

「じゃあ、少しだけ……」

「はい」

ええい、僕は何を無駄に意識しているんだろう。変なことを考えるから余計気になるんだ。

交喙が罰を望んでいるんだから、その望みを少しだけ叶えてあげれば——。

そう思って交喙の持っていたバッグを開けると、彼女の衣類が目に入った。

いつも制服を着ているので、特にたいしたものが入っていない。タオル、ドライヤー、鏡、リップクリームなど、そして——下着が目に入った。

黒い小さなリボンで飾られたもの、フリルがついたもの、淡いピンク色のものが、上下セットでそこにあつた。

「……………」

「その、あまりじっくりと見られると、恥ずかしいのです、が」

交喙が顔を背けたまま僅かに頬ほほを赤らめて、静かな抗議をしてくる。

僕は無言でバッグを閉めると、どくどくと心臓が高鳴るのを感じてしまった。後輩の下着を見た。

「それも、今晚と明日の二日間を着ることになるであろう少女の下着を。」

「一応、遥香ちゃんに見繕ってもらったんです。服は高いのであまり買えないのですが、せめて下着くらいは、と」

「いや隠そうよ！色つきのビニール袋とかなんでもいいからさ！こういうのは見えやすいところに置いちやダメでしょ!？」

「はい、すみませんでした」

おかげで思い切り見てしまった。今すぐ忘れようと思うのだけど、不覚にも目に焼き付いてしまったので色々辛い。

「ひゅーひゅー。交喙ちゃんやるねー！策士ー！」

「あざといわ……！いつの間にこの子、こんなにあざとくなつたのかしら……」

遥香が僕たちのやりとりを見て喜び、宮越さんが全身を戦慄かせた。

「ねえ、都築君……?」

そして、彼女はそつと自分の持っていたバッグを差し出そうとして――、

「……いや、宮越さんは何も悪いことしてないでしょ!？」

「どうしてあたしの考えてることが分かったのよ……!？」

合宿初日だというのに、僕は頭が痛くなってきた。

「全く、いつまで遊んでいるのかね君たちは?」

ロビーで僕たちがそんなことをやっていると、一足先に二階へ向かっていた京先輩が降りてきた。

「これは放送部の活動なのだからな、気持ちには分かるがあまりはしゃぐなよ?」

「あなただけでは言われたくないですよ!」

ひとまずそう突っ込んで、僕たちは二階の部屋へ向かうことにする。

合宿所はあまり大きくない施設なので、部屋は大きくわけて、四つ、二段ベッド付きのふたり部屋が三つと、だだっ広いが畳だけの大部屋がひとつ。運動部なんかが利用するときには、大抵の部員が大部屋で雑魚寝になり、教員がふたり用の小部屋を使用するらしい。

メンバーが少ない部活や生徒会などは、大部屋はもっぱら大勢で騒ぐときに使うようだ。

今回は、他の部活が予約をとっていないので、どちらも空いているし、管理人さんがいるから、引率の先生も特にない。

従って、必然的に唯一の男である僕が一つ目の個室にひとり入り、残りのふたり部屋は京先輩と宮越さん、交喙と遥香という構成になった。

「ふう……」

ようやくひとりになれた僕は、部屋の隅に荷物を置いてため息をつく。

食事の予定は十分後の七時半から、一階の食堂で摂ることになってるらしい。ふたり部屋にしてはやや狭い気がするが、もともと贅沢を言うような施設じゃない。

「それにしても……」

アドレスまで偽装した京先輩のメールのせいで忘れていたが、僕が合宿に参加することになった以上、僕の自宅にいる理解にも連絡をつけておかないといけない。

理解が普段僕の家で居候していることは、母さんには内緒の出来事なのだ。たまにしか帰ってこない母さんだが、うっかり留守番している理解と鉢合わせでもしたら大惨事になる。米やレトルト食品は残してあるから、たかだか二日で理解が飢えることはないと思うけど、念のためだ。

だが、こんなときに限って寝ているのか、携帯電話にかけてみたが、理解は全く出なかった。

「大丈夫かなあ……」

さすがに問題を起こすつてことはないだろうけど、理解をひとりきりにしておくのは色々と不安だ。僕がいない間に、代わりに家事なんかやってくれるタイプじゃないことは分かってるので、近所に迷惑を掛けなければいいやという気分だが。

とりあえずジャージに着替えようと、僕は部屋にあるクローゼットを開け――、

「……………」

見ではいけないものを見て、僕はとっさにそのドアを閉じる。

一瞬、死体か何かでも隠されていたのかと思ったが、幻覚か何かだろうか、落ち着け、ここはいったんベッドに寝て冷静さを取り戻そう。

「え……………」

そう思つて、既にメイクのされた二段ベッドの下の段に潜り込むと、布団の中でふにっと柔らかく、艶めかしい感触がした。

「ふふっ、こんな時間からおつ始めようなんてさすがだな、れーくん」

「……………!?!」

気づいたときには遅かった。僕はいつの間にかそこに隠れていた少女に引きずり込まれ、瞬時に組み伏せられてしまっていた。

「そんなに俺様に会いたかったのか？ 全くもう、可愛いなあ君は」

濃紺の長い髪と、怪しく光る赤い瞳。そして口元で結ばれた薄い笑みは、まさしく理解本人だった。

「ちよつと、何で君がここにいるんだよ!? 僕が学校を出たとき、家で寝てたじゃない!?」

「君も平和ボケしたもんだな、れーくん。君の部屋から衣類や小物がごっそり無くなったことくらい、俺様が気づかぬーでも思ったのか？ その後、君が携帯のメールを見るなりこそそこと出かけるのを見れば、大体何が起こったかくらい予想がつくさ」

まるで、僕が気づかなかったことを小馬鹿にするように、理解はふっと笑みを浮かべる。他人の目があるときの、彼女らしいいつもの態度で。

「何か怪しいと分かかって、あえて僕を尾行してたってこと？」

僕の元に現れるまでずっと足のリハビリをしていたらしい理解は、まだ走るのはいまぐいがないが、長い距離でなければ、歩くのは平気になっている。

だが、理解は僕の予想を鼻で笑ってみせた。

「このクソ暑い中、俺様がそんなめんどくさいことするわけねーだろ。今日はたまたまヤツがやってくる日だったんでな、尾行はヤツにやらせておいた」

「ヤツって……じゃあ、まさか——」

人付き合いが少ない理解が、知り合いと呼べる人物。

いるとしたら、おそらくひとりしかいない。

「こんばんは、初様。お久しぶりです」

「……こんなところで何をしているんですか？ 水無月さん」

ベッドを抜け出し、もう一度クローゼットを開けると、『ナグルファル』に乗り込む直前を最後に会っていなかった侍女姿の女性が、柔和な笑顔でその場に立っていた。

「いえ、ようやく休暇が少しだけ取れましたので、ちよつとおふたりの様子を窺いに参りました。理解がご迷惑を掛けてなければいいんですが」

「もちろん掛けてますけど、それよりどうしてクローゼットの中に……？」

「その方が面白そうだと、理解が言っていましたので。どうでしたか？ 驚きましたか？」

「心臓に悪いのでもうやめてくれると助かります」

「ありがとうございます。私も狭くて苦しかったので嬉しいですよ」

話を聞くと、水無月さんはもう理解の従者ではないため、個人的に友人として会いに来たらしいのだが、ならば何故メイド服なのだろうかということとは、あえて突っ込まなかった。

「……………」

しかし、会えて嬉しいと思うと同時に、少しだけ妙だと感じた。

僕が聞いていた月見月という組織のことを考えた場合に思い浮かんだ不可解な点。だけど、それについて触れるのは今はやめておくことにする。

「それより飯はまだかれーくん。こんなところに来たせいで食う暇がなかったから、俺様は腹が減ったぞ」

今日だけで既に五回くらい気が動転してる僕に向かって、理解はベッドに寝たままそう言ってくる。

「そんなことよりさ、勝手に学校の施設に入り込んでるみたいだけど、許可はもらってるの？」

僕が疑わしい目を向けると、理解と水無月さんはしばし視線を合わせて、数秒。

「まあ、なんとかなるだろう」  
 「ならないよっ！ 生徒じゃないと泊められないから、バレたら追い出されるからね！」  
 そして、侵入したふたりをどうにか合宿所に泊めるための手続きが始まった。

\*

「さて……、いつの間にか私の想定を大幅に超える事態となってしまうわけだが……やむを得まい。その我が儘娘と初対面のメイドさんも、合宿の参加者として認めよう」

三十分後。合宿所の管理人さん（まなま）をどうにか説得して、僕たちはふたりを宿泊させることに成功した。

建前上は、理解が少し前にこの学校を転校した元生徒と、水無月さんがOBのひとりという設定になっている。

いろいろ無茶があったと思うが、管理人さんがかなりの年配でおおらかな（悪く言えば抜けている）性格なことで、夏休みの最後という状況が後押ししてくれたようだった。

どちらかというところ、この件に関しては管理人さんより残りのメンバーの方が驚いていたようだったが、それは僕も同じなので特に触れることはないと思う。

「まあいい、少し面倒な相手が増えたようだが、大勢には問題あるまい」

食堂兼会議部屋のスペースに集合した僕たちの前で、京先輩はやうんざりしたようにそうまとめた後、声を張り上げた。

「よく聞け！ メンバー一同。これから我が放送部のメインイベント、合宿王様ゲームを開始する！」

「……はい？」

謎のネーミングセンスに一同が首を傾げると、京先輩が簡単に、その『ゲーム』のルールを説明してくれた。

「この合宿の三日間で、一日ごとにペアを組み、ひとつのゲームを行う。それに勝利したペアが、敗者のペアに対し、ひとつだけ好きな命令を下せるというゲームだ。罰ゲームがなければ、勝負は面白くないからな」

「これは放送部の活動と、何か関係があるのでしょうか、か」

交際が冷静に突っ込むが、京先輩は何事もなかったように話を続ける。

「では、まずは初日のゲームをこれから始めることにする。各自くじを引いてくれ、それ为本日のペアを決めることにしよう」

言われるままに京先輩お手製のくじと引くと、すぐにペアの相手が決定した。

「やったわ！ よろしくね、都築君」

何故かガッツポーズを決めている宮越さんと、初日は協力してゲームを行うことになった。

残りのペアは、京先輩と理解、交喙と遥香という組み合わせとなり、色んな意味で部外者の水無月さんは、全体を通してゲームの審判をすることになった。

「では、初日のゲームを発表する。『料理』だ！各自今晚の夕食を作り給え」

「……って、ちょっと待ってくださいよ。僕たちが作るんですか……？」

「当たり前だ。君たちはここをホテルか何かと勘違いしていないかね？ 全て自分でやらなければ始まらないぞ。材料は皆が持ち寄った物が冷蔵庫にあるから、適当に使うがいい」

突然参加することになった僕以外は、合宿の予定を知っていたせいか、大きめの冷蔵庫の中には、大量の食材が入っていた。

調理場には年代物の調理器具を含め一通り揃っていたが、調味料関係は最後に使われた日付が分からないので、色々と怖そうだ。

「調理時間は三十分以内だそうです。一番おいしい物を作ったペアが勝者となるそうですので、頑張ってください」

審判となった水無月さんのかけ声とともに、僕たちは料理を始めることにした。

「そういえば都築君って、そこそこ料理できたわよね？」

「まあ……、人並みにはってレベルだと思うけど」

僕とペアになった宮越さんが、そう尋ねながら、周囲のペアたちを見回し、

「なら、敵はひとつに絞れそうね」

と、交喙と遥香のペアを睨んだ。

理解と京先輩のコンビなんて初めから論外だから、僕もその見立ては間違っていないと思う。

「じゃあ、とりあえず私が作るわね。こう見えても料理は割と得意だから」

とまで言われれば、僕はサポートに徹した方がいいかもしれない。

「ところで、何を作るの？」

「そうね、予定ではカレーかシチューかハッシュドビーフかしら。まあお弁当に入れる物くらいなら他にもできるけど、あまり見栄えがしないしね」

うん……まあ、その料理って全部ひとつの変化系で作れるけどね。僕もよくやるよ。

「それはいいと思うけど、ルーとかはあるの？」

「もちろん、それくらいは——」

と言いながら材料の袋を探っていた宮越さんの手が、ぴたりと止まる。

「あれ……？」

なんとなく嫌な予感がした。

「えっと、確かここに入れておいたはずなんだけど……、どこに行ったのかしら」

「……………」

とりあえず、持ってきたらしいルーのバックを僕たちは探したが、見つからなかった。

「もう一度聞くけど、都築君って料理作れたわよね？」

びたりと手の止まってしまった宮越さんが、真剣な眼差しを僕に向けてくる。

「まあ、たいしたものじゃなければ」

「ちよっとメニューを決めてくれると助かるわ」

「うん……」

やっぱり忘れてたらしかった。

「つていうか、よく考えたら調理時間三十分でカレーとかは難しいと思うから、簡単にできるものにしてようか」

「くっ……、何で制限時間なんて余計なものがあるのよ……!」

下唇を噛んで悔しがる宮越さんを見る限り、完全に忘れていたっぽかった。

「ええい、貴様はまともに野菜も切れんのか? というか、やる気があるのか?」

「あるわけねーだろ。俺様ができるのは味見だけだ。さっさと作れこの乳だけ女が」

理解と京先輩のベアを横目で眺めると、そんなやりとりが聞こえてくる。

まあ、あのコンビがいる限り最低でもピリを引くことだけはなさそうだ。

「じゃ、とりあえず簡単にできそうな野菜炒めかスープでも作ろうか?」

「やけに地味なチョイスをするわね……。まあいいけど、もうちよっとロマンチックな気分に浸れる料理はないのかしら」

「作る過程でそれは無茶だと思うけど……」

そう言いながら、僕は野菜を取り出してまな板の上に載せる。

野菜を切りながらちらりと隣の調理場を窺うと、交喙はご飯をフライパンで炒めている

ようだった。

なんか、ほっとする。

予想通りチャーハン系統っぽいので、少し野菜を入れておいた方がいいだろうとか、余計な計算が働く時点で、僕は料理勝負には向いてないのかもしれない。

そんなことを考えながら調理を終え、すぐに美食の時間がやってきた。

\*

「お疲れ様でした皆さん。では、夕食にしましょう」

八時半過ぎ。水無月さんの音頭でついに合宿初日の夕食が始まった。

ちなみに水無月さんによる料理の採点は既に終わり、勝者は交喙と遥香のチームということになった。

「うー……。今ひとつ納得いかないわね」

どこか不満げな宮越さんだったが、実際僅差での負けなのだから仕方ないと思う。

「お兄さんも、どうぞ」

結果が出た以上、作られた料理は誰が食べても構わないので、とりあえず自分の野菜スープに手を伸ばすと、目の前にやってきた交喙が、オムライスの載った皿を差し出してきた。「あ、これって交喙が作ったの？」

「はい。わたしがチャーハンばかり作っているとと思われるのも心外です、から」  
意外とバリエーションにも気を遣って努力していたらしい。いや、これも一種の変化系ではあるけれど。

一口食べてみると、普通においしかった。特別なものはないけど、彼女が地味に続けてきた努力が、垣間見えるようだった。

「うん、おいしいよ。頑張ってるんだね、交喙」  
僕がその声をかけた直後、いきなり隣から理解の腕が僕の首に絡んできた。

「はっ、相変わらずせこましいヤツだな、この根暗女は。自分の失敗作は隠して食ってるくせによ」

と、交喙の席に置いてあるオムライスを、理解が笑みと共に指差した。  
どうやら、一番出来のいい物を僕に渡してくれたらしい。

「ボロボロのオムライスを僕の視界からさっと隠して、交喙は理解を静かに睨む。  
「あなたこそ、最低限食べられるものは作れないのです、か？」

ちなみに、水無月さんを始め、理解と京先輩の料理は誰も口にしていない。

まあ、料理の原型もなにも無かったし、食べたら腹痛でも運がいいレベルだから、それで正解だろう。

「しかし、ともに飯を作れる者がいてよかったな。これからの食事は彼女たちに頼むとしようか？」

理解と交喙の争いに我関せずといった様子で、京先輩が呟く。  
「いえ、明日からはよろしければ私が作りますので、皆様はお休みになつてください」

と、笑顔で水無月さんが申し出てくれたので、正直有り難かった。

「うむ、うるさいおまげがついていてなんだが、あなたが来てくれて助かったぞ。では——  
とりあえず、交喙君と遥香君。今日の勝者は君たちだ。願ひ事を何かいい給え」

遥香は特に願ひ事はいらないと云った。

「あ、私は別にいいつす。宮越先輩に勉強でも見て貰えれば——」

遥香が比較的まともな願ひ事を言いながら、そっと交喙に目配せした。

「そうですね——。では」

そして、交喙がゆつくりと、勝者の特権である、「命令」を口にする。

「今夜一晚、お兄さんと一緒の部屋に、泊めていただけじゃないでしょう、か？」

「なっ——!?!」

と、周囲の空気が、その一言で一気に熱を帯びる。

僕はさっきの料理対決で、ちよつぴり料理の選択に手を抜いたことを後悔した。

「いやちよつと、さすがにそれは——」

まずいんじゃないだろうか。

そう言おうとしたとき、交喙<sup>いすか</sup>が僕の耳元に口を寄せ、そつと囁<sup>ささや</sup>いてきた。

「大丈夫です、よ。わたしはお兄さんの二号でも、構<sup>かま</sup>いせんから」

そう言った彼女の無表情は、少しだけ悪戯<sup>いたづら</sup>っぽく、微笑<sup>えいご</sup>んでいたようにも見えた。